

## 南蛮屏風をよむ

坂本 満

今回の講演で、現存点数の多さが改めて明らかになった南蛮屏風の、その数の多さの理由を考えることが最初の課題である。作品の来歴から見える需要者の性格、屏風の役割の問題がここでの課題である。

第二点は南蛮屏風に現れるモチーフや、景観についての問題である。描かれた異文化モチーフと歴史的事実としてあったと思われるものとの形の照合作業には、私としてはかねてから興味をもってきたが、この照合作業は単純ではない。というのは歴史的事実といっても、その大半はもはや「もの」として残っていない。したがって、描かれたもの、表現されたものとして残されていることが多いので、日本での伝統的な表現形式の研究をなおざりにしてきた私としては、その専門研究者に委ねたい部分でもある。しかし私の力の範囲は限られているが、部分的であるにしても、あえて試みることは必要だと考えている。

ここではまず屏風に現れる船型の曖昧さについて、ついで南蛮人の描かれ方、その服装とハンカチなどの持ちもの、傘、服地の質感、布地模様、身ぶり、帽子、

肩のマント、顔つき、コミックな姿、中国婦人、朝鮮風俗の問題、韃靼人の表現などを検討する。そこから、日本近世における異人や異国概念の特性に気づかせられる。「唐」と「南蛮」との差異がどの程度のものであったかが問題なのである。

ついでに、屏風の左隻に異国情景をもつものの表現を、さまざまな<sup>タイル</sup>磚、多彩な屋根瓦と同時代の狩野派による中国宮廷図との比較、狩野内膳の屋根に注目する。

最後にむずびとして、画家にも需要者たちにも見ることのできない異国とその文化の表現の特色を略述した。それを要約すれば、既知の形体の流用・変形・歪曲を通して、結果としては「異文化」なるものを新たに創出する過程と考えてよいと思う。また異文化、異物なるもののもつ特異な力、異能性と、宝船信仰、七福神との重なり、彼岸世界と異国の表現の差、異国趣味の衰退とそれに対する評価の難しさと表裏をなす不当な評価について、推定されるその理由を二点、コロニアリズムとナショナリズムの問題として指摘した。

さかもと みつる／お茶の水女子大学 名誉教授